

















春秋・戦国期は中国史上において最も文字の変化が激しかった時期である。その文字変化を研究することで、分域論についてさらに理解を深めることが可能であると考ええる。今回は特に何琳儀の簡略化を挙げる（何琳儀 1989 pp.202～213）。

- ① 「画数の減少」（単筆復筆簡化）：“実際には画数が多少減少しても文字の総合的な字形に変化はあまり見られない。もちろん相当数の画数が減少してしまえば同じ文字と判断することができない場合もある。”（p.202）ここでいう「画数の減少」の全てが故意に“簡略化”を目的としたものなのか疑問ではある。ただ単に書き忘れまたは書き損じという可能性はないだろうか。2千年以上前のことなのでそういった可能性も否定できない。

往  →       羊  →   
 善  →       爾  → 







- ② 「濃縮形体」：“ある文字の象形部分を簡略化する方法。濃縮することで文字の大幅な変化を避けることができないが、ある一定の部分や部首によってその文字を識別することは可能である。”（p.204）以下の例を見て分かるように、円系や方形のものが押しつぶされて単線化している。

豊  →       宮  →   
 昌  →       樂  → 

- ③ 「文字の構成部分の簡略化・削除」（刪簡偏旁）：“文字の構成部分はその文字の表意的機能を備えているため、軽率に簡略化や削除するべきではない。しかしながら戦国文字の中には文字の構成部分を簡略化し、またそれをそのまま取り除いてしまうこともあったようだ。”（p.205）

夏  →       敢  → 

- ④ 「意符の簡略化・削除」（刪簡形符）：“（ここでは特に会意字の構成部分）一般的に言えば、意符を簡略化・削除することは会意字または会意字の構成部分の効能それ自体を失うことになる。しかしながらある特定の制約の下で、この種の文字は識別することができる。たとえば三つ以上の構成部分からなる文字構造では、ひとつの文字構成部分が欠けても識別上は問題ない。二つの構成部分からなる会意字でも、ある制約下ではひとつの文字構成部分を省くことができる。これによって、たとえば「土金」は「吉金」と読むことができる。このような簡略化をなされた文字は戦国文字の中には数多くある。”（p.206）

明  →       乘  →   
 官  →       違  → 

- ⑤ 「音符の簡略化・削除」(刪簡音符)：“形声文字の音符は一般的に削除不可能であり、「省声存形」は形声文字ではあり得ないことである。しかし西周金文文字には確かにこれらの特殊な現象が現れている。「霸」を「雨」と表記し、「皇」を「自」と表記しているものがそれである。もちろんこれらの簡略化はごく少数ではあるが、金文と同じように戦国文字にも幾つかある。例えば、「𠄎」の「門」を省いて「𠄎」のように表記し、また「邪」の「牙」を省いて「𠄎」のように表記している。このような文字は貨幣に多く見られる。” (p.207)

軫 𠄎 → 車      葉 𠄎 → 𠄎

- ⑥ 「同形の簡略化・削除」(刪簡同形)：“古文字の中の多くは「林」、「丝」、「品」のように同じ形のものを幾つか重ねて表記する。もしそういった文字が単体で表記される場合、簡略化・省略化することはできないが、何か別の成分と重なって表記される場合には、ひとつもしくは二つを削除することができる。” (p.208)

宜 𠄎 → 𠄎      幾 𠄎 → 𠄎

絶 𠄎 → 𠄎

- ⑦ 「字画の共有」(借用笔画)：“字画共有(借用笔画)は周末期における非常に興味深い簡略化のひとつである。ひとつの文字のふたつの字画の位置が近いところにあると、その二つの字画が結合してひとつの字画になる。それが字画共有(借用笔画)とよばれる簡略方法である。戦国文字の中でこういった簡略化は頻繁に行われたようである。” (p.209)

司 𠄎 → 𠄎      固 𠄎 → 𠄎

官 𠄎 → 𠄎      名 𠄎 → 𠄎

- ⑧ 「近似部分の借用」(借用偏旁)：“似ている文字構成部分を借用するといったほうが適切だろう。一字の中で二つの文字構成部分もしくは文字の一部が非常に似た形を成しているならば、どちらかひとつを削除することができる。上述の⑥「同形の簡略化・削除」(刪簡同形)と非常に似ているが、しっかりと区別しておく必要がある。「同形の簡略化・削除」(刪簡同形)は完全に同一である部首を簡略化・削除する。一方で「近似部分の借用」(借用偏旁)は似ている文字構成部分を借用することである。文字構成部分が同形であるか否かがその違いにある。” (p.209)




部 𠄎 → 𠄎

以上が何琳儀の挙げる主な簡略化である。②、⑥、⑦の簡略化以外は2千年以上前のことであるから、書き損じではないかという疑問も残ることも否定はできない。




また今回は特に一文字間における簡略化を挙げた。何琳儀(1989)ではさらに二文字間の簡略化なども記されている。これは次回に譲ることにする。

また何琳儀の簡略化の枠組みに沿って考えると非常に興味深い文字があるので今後幾つか紹介したい。



・「晋」

甲骨文字： 金文： 説文解字：


1. 「晋陽」『古銭大辞典』（丁福保 1982 中華書局）

 A (p. 403)  B (p. 413)  C (p. 414)

2. 『温県盟書』（河南文物研究所『文物』1983）





 D (p. 83 図6)  E (p. 83 図8)

3. 「晋戈」『戦国古文字典』（何琳儀 1998 中華書局）

 F (p. 1152)

以上六字の三晋系の「晋」を挙げた（文字後部の英字は判別のために表記した）。春秋・戦国時代の「晋」字は甲骨・金文と比べて、上部の簡略化が進んでいたようである。この点は齊系・秦系を除く地域の多くと同様である。それ以外の簡略化を上述の何琳儀の簡略化の分類と比較すると非常に興味深い。

例えば甲骨・金文の文字から上部が簡略化される（甲骨・金文 → C）。この簡略化は上述の②「濃縮形体」に相当すると考えられる。その後、⑥「同形の簡略化・削除」（删簡同形）の簡略化がおこり、上部の文字構造部分がひとつ削除される（C → F）。そして、⑦「字画の共有」（借用笔画）がおこり上部の一部と下部の一部がそれぞれ共有し A、B、D、E のように変化したことが予想される。以下の通り。

 (甲骨・金文) →  (C) →  (F) →  (A、B、D、E)  
②「濃縮形体」⑥「同形の簡略化・削除」⑦「字画の共有」

これは三晋系での文字変化の激しさを想像させるが、まだ予想の範囲を越えないため今後のさらなる研究を待たねばならない。

#### <参考文献>

丁福保 『古銭大辞典』 1982年 中華書局

河南省文物研究所 「河南温県東周盟誓遺址一号坎発掘簡報」『文物』1983年  
文物出版社

何琳儀 『戦国文字通論（訂補）』1989年 中華書局

何琳儀 『戦国古文字典』 1998年 中華書局